

サカハチチョウ、それも赤い春型をみると昆虫少年として行動範囲を一気に広げ始めた頃の記憶がどつとよみがえる。1955年5月、中学校の科学班員となって先輩たちに案内してもらった最初の遠隔地が高知市鏡村川口。市内を走るチンチン電車で蛸橋までゆき、そこから片道10kmを徒歩で往復というかなりの強行軍。道中、先輩が「テフテフよ早く出て来い」と呪文のようにテフテフとは一体どんなチョウなのか。想像ができないままついてゆき「それ出た！」といわれて目にしたのが初めてみる小さくて赤いチョウ。表面には何か文字を書いたような複雑な白い線がいっぱいあり、捕らえてみた裏面の表とは全く異なる独特のチョコレート色と複雑な模様。蝶類図鑑を眺め回していたはずなのにこのチョウについては何一つ記憶がなく、初めて出会ったチョウの中でも強烈なインパクトで脳裏に刻み込まれた。

実は川口までの採集行の主目的はウスバシロチョウで、このチョウのライダーのような緩やかな飛翔に出会いたくて先輩たちはかくも遠い遠征を企画してくれたのだったが、初めてみたチョウとしての印象はなぜかサカハチチョウが勝ってしまう。このチョウは花を訪れた際に簡単に羽を開いた姿勢をとってくれるので、カメラ撮影にチャレンジし始めた初期の段階で格好の被写体となってくれたチョウでもあり、1981年5月、家族で初夏の溪流遊びをした兵庫県福知溪谷では存分に撮影を楽しめた。



夏型が裏面をみなければ春型とはまるで別種のように、よく似たイチモンジチョウの仲間とあわせて好きなチョウとなっている。その夏型は花よりも路面の水分を求めて飛び交う姿を見ることが多く、点々と場所をかえて路面すれすれに飛び遊ぶ光景をながめていると時間のたつのをわすれてしまうのどかさだ。

一眼レフデジカメ CanonEOS10 によるチョウの飛翔撮影に初めて成功したのもサカハチチョウ夏型で、2004年8月25日、開田高原の林道で楽しい時間を提供してくれた。



2017年7月に久しぶりに

チョウ目的で遠征した北海道では、ヒメジョオンの花蜜に夢中のサカハチチョウを撮影記録した



が、北海道では7月半ばでも春型がみられ、6月下旬にはツマキチョウの姿もみられて、季節感がおかしくなってしまう。